

KISS & ICK

- It's a marvelous day -

shiroa

standing up

―― 元気になれる物語があります。

悲しいお話。苦しいお話。辛いお話。
そんなお話が読みたくなることがありますね。

けれど時には、気持ちが晴れるような、明るいお話はいかがでしょうか。

この本には明るい、感動的な、元気になれるお話ばかり集めています。

タイトルを見て、気になる話だけ読んでみるのもいいでしょう。
好きなお話ばかり、何度も何度も読むのもいいでしょう。

ひとつの物語はどれも短いものばかり。
ちょっとした時間に、ちょっとした清涼な気分転換に。

この物語たちがあなたのお役に立てば幸いです。

～ ☆ ～ ★ ～ ☆ ～ ★ ～ ☆ ～ ★ ～ ☆ ～ ★ ～ ☆ ～ ★ ～ ☆

このお話の一部は『今日もいいね！』というYoutubeのチャンネルでテキスト映像化されています。
よろしければ併せてご鑑賞下さい。

>Youtube cannel 『今日もいいね！』
<https://www.youtube.com/channel/UC0HxTEy9iZNoKshVUxXQCKw/>

story-01 タイムカプセル

僕らは昔から仲が良かったんだ。
遠足や、校外学習や、クラブ活動や。
何かする時にはいつも一緒にいたんだ。

卒業が近づき、
タイムカプセルに入れる
手紙を書くときだって、

今、気になっている
女の子への手紙にしようぜ

二人で示し合わせて書いたんだ。

もう卒業式だって時に、
ささいなことでケンカをした。
どうでもいいことだったんだけど、
二人とも意地はって、
結局、卒業式も、
口をきかずに過ごした。

春休みの間には仲直りしよう。
高校へは一緒に通おう。
そう思ってた。

思い切って
あいつの家に行こうと思った日。

午前11時半、
車の事故で即死だった。

そんな連絡が入ったんだ。

なんだよ、これ。
これじゃ、謝れないじゃないか。
僕は、どうしたらいいんだよ。

お葬式で焼香をあげても、
どれだけ手を合わせても、
目の前にあいつはもういない。

どうしてもっとはやく、
謝らなかつたんだらう。

後悔ばかりが胸にやってきた。

そんな気持ちを持ったまま。
月日は流れて、
僕は二十歳になった。

成人式のあと、同窓会があつて。
タイムカプセルを開けることになった。

一枚一枚を読みあげて、
その後に書いた人の名前を紹介して。
恥ずかしがったり、笑ったり、
バカだつっこんだり。
結構盛り上がったんだ。

もしまだ恋人がいなかったら、
僕と付き合ってくれ！

僕の手紙が読まれ、どきどきしてると、
告白された本人はぺろりと舌を出し、

あいにく、今度結婚するから。
ごめんね。

そう言われた。

僕が赤面していると、

次の手紙が読まれた。

もしかしたら、
遠く離れて生活してるかもしれないな。
ケンカして、
そのまま口をきいてないかもしれないな。
けど俺は、お前といつまでも親友だぜ。
何かあっても
俺はお前を信用してるからな。

あいつの、僕への手紙だった。

あいつは、はじめから、
きっと、僕をゆるしてたんだ。

涙と共に、やっと。
心のとげがとれた気がした――。

うちの子にはちょっと困ったクセがある。
何でもポケットに入れてしまうのだ。
外に遊びに行くと、石やら草やら、いろいろなものを入れてくる。

理由を聞くと首をかしげる。
なんとなく手にとって、そのままポッケに入れてしまうのだろう。

幸い、万引きのようなことは無い。
きっと何か基準があるのだろう。
死んだカエルが入っていたことはあるが、それ以外はびっくりするものはなかった。

だから注意はするけれど、あまり叱らないようにはしていた。
いつか治るだろう。そう思っていたのだ。

ある日。幼稚園の名札の中に、しおれた草が入っていた。

「今度はどうして名札に草を入れてるの？」

息子は顔を輝かせて言った。

「ママ、喜ぶと思って！」

どうも私にあげようと思って、机の上においていたらしおれたらしい。
でもそれを名札に入れ、忘れないように持って帰ってきたのだ。

私は捨てようと思ったが、なんとなく水に浸し、草を戻してみた。
どんな草だったのか、それだけでも確認しようと思ったのだ。

「あっ！」

思わず声が漏れた。
息子は嬉しそうに、満面の笑みを浮かべている。

「ありがとう、四つ葉だったんだね」

息子のクセは困ったものだけど、ちょっとだけ楽しみになったのだった。

——もう3日も眠れない。

雨が降り続けていたけど、やっと空に太陽が戻った。

部屋に閉じこもっていたけど、余計に気を病んでしまいそう。

太陽の力を借りて、今日は外に出かけてみよう。

おともは明るい曲がいいね。

電車に乗って、知らない街へ。

私の知らない街は、私を知らない街だから。

電車の窓に映る自分の顔を見て、思わず笑顔を作る。

口をへの字に曲げてちゃ、折角の気分が落ちこんじゃうから。

ずいぶん遠くにやってきた。

駅を出て深呼吸すると、空気の味も違っている。

すがすがしい青空をみつめ、新しい自分になった気分。

いいね、この感じ。

歩いていると、汐のにおい。

海が、見えてきた。

私は思いっきり大声で叫んだ。

「ばかやろー！」

周りにいたおじさんたちが驚いている。

気にせずに、もう一声。

「でも、ありがとー！」

すかっとした。

私を知らない街だから、私はぜんぜん恥ずかしくない。

帰り道は、なんとかなるだろう。

遠回りも、いいだろう。

次の恋が、私を待ってるんだから。

story-04 鈴の音響く夏の夜の夢

今日の仕事もそろそろ、といったところで彼からのLINEが入った。

“今夜ドライブできないかな？”

何度かやりとりしたが、どうしても今日がいいらしい。

“わかった、待ち合わせは？”

急ぎょ二人でドライブすることになった。

「以前から機会があれば連れて行きたいと思っていたんだ」

彼の出身地は群馬の山の方だと言っていた。

その生まれた場所に、と聞くとなんだか大切な告白なのかも知れない。

高速道路を下りて、しばらく走り山道に。

さすがに実家があるようには見えない。

駐車場というには心細い、砂利のスペースに車を止め、これから林の中に入っていくという。

時は八時半。「急がなきゃ」と彼は言う。

懐中電灯は使わず、薄暗い半月の月明かりだけを頼りに歩く。

スマホの懐中電灯機能はダメと言われた。

こんな時間に、こんな場所で……。

なんか蒸し熱いし……。

ちょっと怖い気もしてきたけれど、特別なトラブルもないし。

私は彼を信じてついていく。

と、そこに黒く流れる小川が。

ちらりと点状の光が揺れた。

豆電球の光を小さくしたような、そんな光が、ふわふわと浮いている。

「ホタルだ」

そこで風鈴の音が響いた。

持参した風鈴を木に結びつけたのだろう。

「本当は静かに鑑賞した方がいいんだけど」

静かに彼は言った。

―― 一度目を閉じてみる。

水の流れのせせらぎと、わずかにそよぐ葉の擦れる音。

それに鈴の音が重なる。

目を開けると月の暗影に、わずか揺れ動く光。

とてもこの世のものとは思えない。

まるで、夢をみているようだ。

「これだけの条件が揃うことが滅多にないから。俺もはじめてなんだ」

考えてみれば、これが当たり前だったのだろう。

昔の人が想像する現代の生活の方が、よほど夢に違いない。

けれど、今の私たちの生活にとって、この景色こそが夢幻に思える。

放心状態の私を、彼の体温が包み込む。

この特別な時間を、少しでも長く感じていたかった。

僕の町は貧しい。

資源に恵まれた土地、と言われているけれどいつもお腹を空かしているし、安全な水を手に入れるのも大変。

村落単位で助け合ってなんとか生きている。

そんな感じ。

みんながいうんだ。

世界にはもっと豊かな国があって、病気も、食べ物も、水も困らない国がある。

だから、この町だって変えることができるんだと。

希望を持って努力をすれば、必ず変えられるんだと。

そのためには勉強することが大切。

そういう先進国と呼ばれる国で、技術や知識を学んでくることが大切。

だからまず、外国の言葉を学ぶことが必要なんだ。

村のみんなは僕が優秀だからと、村を代表して学校に通わせてくれている。

みんなの期待と希望を背負って、僕は一生懸命勉強しているんだ。

英語もだいたいわかるようになって。

今度、日本語の先生が来ることになった。

日本語を学ぶのは楽しみなんだ。

だって、大きな戦争があったのに、20～30年くらいで先進国の仲間入りするくらい、あっという間に

発展した国だから。

僕は将来日本に行って、その秘密を学んできたいんだ。

そしたら、この村も。

僕が生きている間に素晴らしい環境に、変えることができるかもしれない。

今日、学校に日本語の先生がくる。

「Hello! コンニチハ、ミナサン！」

教室に入ってきた先生は、僕には希望そのものに、輝いて見えた。

夏といえば海。

海といえば……バーベキュー！

今年もこれが楽しみで。

気の合う仲間と連れ立って、

太平洋を焼く太陽が照りつける中、

大バーベキューパーティがはじまる！

“強い日差しと、海風の中で、

海の幸、山の幸を堪能するのって、最高！

“海の幸は市場で買ったからそうだけど、

山の幸はスーパーだけだねえ。

わいわいやりながら

持ちよった食料を料理して。

頃合いをみて、ビールで乾杯！

俺たちの集まりは、

運転手以外ほとんど飲める。

特にビール派が多いのが特徴。

みんなが同じテンションで楽しめる、

この一体感が心地よい。

気がつくテーブルの上に大量のビールが。

透明のカップだから、

それぞれが違う色だってわかる。

“いろんなビールを持って来てみたんだ。

みんなでのもうぜ！

面白い試みだ。

俺も遠慮なくどんどん飲む。

あっさりとしたもの、

フルーティな香りが漂うもの、
ひたすらドライなもの、
ぐっと味が濃いもの、などなど。

聞くと外国から取り寄せたビールもちらほら
ビールだって個性があるもんだと、
改めて実感。

そして「くーっ！」と思わずうなってしまう
ビールに出会った。

“これ最高！

バーベキューの料理にも合うし！
このビールの銘柄は何よ！

ビール担当がちらっと調べて教えてくれた。

アサヒ、スーパードライ
思わずふき出してしまった。
行きつくところは、定番だった！

沈みゆく夕陽を眺め、最高に笑って。
また来年、会おうな！

次にまた楽しくバーベキューを行うために、
明日からの仕事を、
心の底から頑張ろうと思んだ。

大昔のこと。
まだ人類が
文明を持ち始めて間もない頃だった。

生活を守るために
みんなでルールを決めるというよりは、
圧倒的な力を持つ統率者を民衆は求めた。

国というにはおぼつかない集落。
そこには時折、
特別な力を持つ子供が生まれた。
いわゆる超能力者である。

超能力をもつ人間はあがめられ、
統率者に祀り上げられた。

しかしすべての超能力者が、
すぐれた資質の人間ではなかった。
それによってある村落は滅びた。
ある村落は飢えを凌ぐため、
近隣の集落へ攻め入ることもあった。

ある時、
それぞれの集落の統率者が集まった。
首脳会議である。

超能力者はみな違う能力を持っており、
それぞれの能力を活かし合おうというのだ。

その協定で、しばらくは上手くいった。
争いは減り、飢えは減り、苦しみは減った。

だが、ひとりの統率者が死ぬと、
その能力が欠けてしまい、
それを埋めるために再び争いは起こった。

再び首脳会議が開かれた。
今の体制では誰かが欠けると問題が起きる。
だからといって、
それを埋める能力者はすぐには生まれない。
超能力に頼る生活には限界がある。

ならば、
超能力に頼らない生活を確認すればよい。

こうして能力を補う部分は、
お互い知恵を出し合い、
生活するすべを確認していった。

超能力は少しずつ必要性を失い、
やがて、誰も使わなくなった……。
使う方法も、誰も伝えられなくなった。

――そして現在。
超能力者の末裔である私たちの中には、
超能力を持っている人がいる。
しかし使う方法を忘れてしまった為に、
使えずにいる。

能力は使わなければ、無いのと同じである。

橋の上から、眺める。
川の水の流れを、眺める。

太陽の光を複雑に反射させる川面は、
まるで万華鏡。
一瞬も休むことなく、変化し続ける。

この町に引っ越してきて、
散歩をしていて、
偶然に見つけた場所だった。

心がもやもやする時、
ここにひとりで来てじっと川面を眺める。
すると自然と心が落ちついてくる。

風のきまぐれ、木々のせせらぎ、
水の流れる音。
不規則な“1/f”のリズムが、
心を落ち着かせるとかいうけれど。
そんな理屈を超越した何か、
わたしはそれをここに感じる。

いつしか楽しい時も、お祝いしたい時も、
ここに来るようになった。
この場所はどんな時でも、
わたしをやさしく迎えてくれる。

手には花。
わたしはその花を一度ぎゅっと握りしめ、
そして川に放った。

―― 川はその花を下流へ押し流す。

あきれほど早く、

その花は視界から消えた。

「友達になろうよ」

遠くで聞いた気がした。

気持ちをうまく表現することができない、人の気持ちをうまく察せない。

何をやってもうまくできず、勉強もできない、運動もできない、

こんな僕と友達になりたい人なんて、いない。

いつもバカにされて生きてきた。

こんな僕に友達になろうなんて……

肩に手がかかった。

僕は恐る恐る振り返った。

引っ越ししてきたばかりの子だ。

人懐っこい顔で、僕を見ていた。

「俺、まだ友達いないんだ。

な、友達になろうよ」

こうして僕は、はじめて友達と呼べる友達ができただ。

はじめはなかなか気持ちを伝えられなかったけど、一緒に遊ぶのに、そんなの関係なかった。

それどころか、一緒にいて、いろんなことをすることで、うまく話せるようになったし、

いつか運動も得意になってきた。

ただ何もしてなかったから、何もできなかつただけなんだ。

友達はすぐに引っ越ししてしまった。

なんとなく、胸にぽかんと穴が空いてしまった。

また、ひとりぼっちだ。

しばらくして、新しく転校生がやってきた。

すごく大人しそうで、人と話すのが苦手そうだった。

休み時間、彼は机に座って顔を伏せていた。

僕は近づき、こう言ったんだ。

「ねえ、友達になろうよ」

story-10 大嫌いだったヒルクライムの『春夏秋冬』

♪鮮やかな色 四季おりおりの……

俺はこの歌が嫌いだった。

チャライ感じがしたし、メロディも歌詞もなんか抵抗があった。

どんな名曲だって、嫌いな人はいる。理由以前に、趣味や相性の問題なのかも知れない。

俺の友達のYはヒルクライムが好きだった。

携帯の着信もヒルクライムのなんとかって曲を設定している。

そんなYと久しぶりに会った時、俺は驚いた。

奥さんに手を引かれ、定まらない視線でやっと歩いている。

見えないのか？

Yが席を立った時、奥さんがこっそり教えてくれた。

「旦那はね、網膜症でまっすぐ物が見えない障害なの」

よくわからなかったが、障害ということは相当なのだろう。

Yが戻った後も、俺は普通に振舞った。

昔の懐かしい話やバカ話で盛り上がった。

別れた後、楽しかった筈なのに、妙な寂寥感が胸に残った。

数日後、Yに電話をかけてみた。呼び出している時、いつものヒルクライムの曲が流れた。

♪……全ての季節 お前とずっと居たいよ

春夏秋冬

今年の春はどこに行こうか？

今年の夏はどこに行こうか？

春の桜も夏の海も

あなたと見たい あなたと居たい

その歌詞が耳に入った時、とたん涙が溢れてきた。

あいつ、もう奥さんと一緒に、いろんな景色見れないんだぜ。
でもずっと一緒に何かを見て、ずっと一緒にいきていきたい。
そんな気持ちを、きつとこの歌に乗せて.....

「あ、もしもし」

Yが電話に出たが、俺はなかなか一言目の言葉を出すことができなかった。

story-11 ずっと一緒にやっていける予感がした、ある日の夕方

休みの日、彼は料理を作ってくれる。

料理を作ってくれるのはありがたいが、どうも手際が悪い。

みているとイライラしてしまい、どうしても私が手を出してしまう。

彼は「ありがとう」とのんきなことを言いながら、マイペースで料理を作るのだ。

掃除もそう。なんか、抜けている。

洗濯もそう。柔軟剤の量、絶対間違えてる。

一緒にいて、イライラ。

けど、まあ。彼の優しさや、物の見方、感性は好き。

天秤にかければまだまだ一緒にいたいというのが本音なのだ。

ある日、風邪を引いた。

熱も40℃に迫る勢いだ。

ふらふらしながら会社に休みをつけ、

外に出るのも大変なので市販の風邪薬を飲んで布団にもぐった。

気が付いたら夕方。キッチンで物音がしている。

「あれ、起しちゃったかな」

どうして？ まだ仕事のはずでしょ？

「早退して帰ってきたんだ。今夕食作っているからね」

がちゃがちゃ、いつも通り手際の悪そうな音がしている。

けど、その音がなんとなく心地よく感じられた。

とっても温かく感じたんだ。

出来上がったおじやは驚くほどおいしかった。

なんとなく食欲もわいてきて3回もおかわりをしてしまった。

「すぐ元気になりそうだね」

お陰さまで。私はこの人となら、ずっと一緒にやっていける。

このとき、そんな予感がしたんだ。

termination

クラシック音楽を静かに聴く。

そこには押しつけがましい解釈は存在しない。
ただ、素直に感じるままに、感情が動かされる。

むしろ知識を得ることで、決まった解釈しかできなくなるのは不幸である。
ただ純粋に、自分が感じたままがいい。

本来小説とはそういうものである。
ここに散りばめられた作品群は、そんな純粋な物語の原石でもある。

誰にも強制されず、ただ、感じたままに楽しんでいただきたい。

そして、生きることが、少しだけでも “楽” になれば。
—— ただそれだけを願っております。